

日本復帰後の沖縄の自画像と地元メディア —琉球新報の連載企画「世界のウチナーンチュ」 (1984～85年)を中心に

李 真 熙

I. はじめに

ハワイや南北アメリカを中心に、2016年時点で世界各地に約40万人の沖縄系の人びと（移民とその子孫たち）が暮らしている¹。

この論文は、1972年の日本復帰から10年の節目が過ぎた頃の沖縄県の現代史について、「移民」を巡る社会現象から考えている。具体的には、沖縄の地元紙・琉球新報が1984年から85年にかけて展開した「世界のウチナーンチュ」²の連載企画に着目する。連載内容について確認し、企画にどのような歴史的な意味が含まれていたといえるかを検討する。

同連載では新聞記者らが長期の海外取材に出かけ、ヨーロッパ、台湾、東南アジア、オセアニア、ハワイ、南北アメリカ、カリブ、メラネシア、ミクロネシアなど世界各地で暮らす沖縄系移民1、2、3世を訪ね歩いた。連載記事は各地の移民へのインタビューを基にした文章と写真で構成され、新聞紙面では約2年にわたり毎回カラーで掲載された。連載は484回に達した。この企画は大きな反響を呼び「大当たりとなり」³「大成功だった」⁴と関係者らは振り返っている。

連載記事は順次まとめられ、全3巻の書籍として那覇市のひるぎ社から発行された。発売時の書籍には、当時の沖縄県知事・西銘順治のコメントを載せた帯紙が巻かれていた。

私は『日本人になりきれないウチナーンチュ』⁵とって問題と呼んだが、世界で活躍するウチナーンチュは、決して狭い日本のワクにはまらず、伸び伸びと活躍している。新報の『世界のウチナーンチュ』は、県民に勇気と希望を与えたよい企画であった。

西銘はこのように、自身の象徴的なせりふを持ち出して、復帰後の沖縄に同時に押し寄せた「日本化」と「国際化」のうねりといった時代の重層性を浮かびあがらせるような語りで、琉球新報の企画についてコメントを寄せた。また、裏表

紙の帯紙にはもう一つのコメントが載っている。こちらは、後に次期沖縄県知事となる大田昌秀琉球大教授によるものだ⁶。さらに別の巻には、当時の金武町長・吉田勝栄、沖縄県国際交流財団の嘉陽宗陰専務理事、作家・大城立裕らのコメントを載せた帯紙も付けられていた⁷。

琉球新報による「世界のウチナーンチュ」の連載は、県政の中枢を含めて全县を巻きこむように展開していったことが想像できる。

復帰運動が終わり、過重な米軍基地負担が残されたまま沖縄は日本の一県となった。その現代史の輪郭は時代と共に揺らいできた。歴史家の鹿野政直は日本復帰から15年が経った1987年の沖縄について「80年代に入って沖縄は、沖縄を中心にぐるりと円を描くかたちでの文化像を打ち立てはじめたごとくみえる」と述べた⁸。また20年目の節目の1992年については首里城復元などに触れた上で「“琉球晴れ”の雰囲気に沸いているごとく遠望される」として「ヤマトへのこだわりを軸とする歴史意識にかわって前述のように沖縄を中心に同心円を描こうとする歴史の展望が、確実に深まり広まっている」と指摘した。

ここで鹿野がいう当時の沖縄の歴史意識は、西銘が「ヤマトンチュ（日本人）になりたくて、なりきれない心」と言い表した沖縄のアイデンティティや「世界で活躍するウチナーンチュは、決して狭い日本のワクにはまらず、伸び伸びと活躍している」とした海外同胞への思いにも関連するものだといえる。

このように復帰後の沖縄で新しい「自画像」が描かれていくような時代のなかで、地元の言論空間で海外移民を主題とした連載企画が生まれ、全県的に展開していったことは、沖縄現代史上にどのように位置付けられるだろうか。

沖縄の移民研究の蓄積のなかで、金城宏幸は、沖縄にとって20世紀は「移民の世紀」だったと指摘する⁹。その上で、琉球新報の連載企画「世界のウチナーンチュ」については次のように記し、時代が「移民の世紀」から移りゆくなかで、県民の記憶をつなぎ留める役割を果たしたと述べた¹⁰。

1992年には国際協力事業団の沖縄支部が廃止され、公的な機関による沖縄からの移民送り出し業務が事実上終了する（沖縄国際センターが移住業務を引き継ぐ）ことになるが、それに呼応するように、「移民県」と「ウチナーンチュ・コミュニティ」の間には新たな状況が展開し始める。特筆すべきものを挙げるとすれば、80年代にスタートする沖縄のメディアによる「世界のウチナーンチュ」を意欲的に取り上げる試みと、1990年に開催された「第一回世界のウチナーンチュ大会」、それに1990年の入管法の改正¹¹に伴った

海外ウチナンチュによる逆移民あるいはディアスポラの環流ともいうべき日本への「出稼ぎブーム」であると筆者は考える。それらは、集団のライフコースとしての移民の歴史を広く県民の間に思い起こさせ、「記憶の維持装置」として、十分な機能を発揮するものである。

ここで述べられているのは、言い換えれば、地元メディア（琉球新報）による「世界のウチナンチュ」特集は単にひとつの特集として完結するのではなく、行政による移民事業団やウチナンチュ大会、さらには出入国在留管理庁による法律上の課題とも関係する広がりなかに位置付けることができるということだ。

また金城は、地元メディアの連載企画が海外の沖縄系コミュニティへと波及したことに触れて、次のように続ける¹²。

このようなメディアの活動は、当然のことながら県内在住の人々のみならず世界に散在するウチナンチュにも反響が及び、国境を越えてウチナンチュたちが連帯感を再確認し、共鳴し合うようになる。こうした「世界のウチナンチュ」意識が盛り上がりを見せるなか、復帰後20周年という節目を数年後に控えて、沖縄県のあらたな振興策を模索し続ける県政の施策の延長線上に、移民一世の故郷への想いと二世・三世などのルーツ探しを熱望する声、そして沖縄県民の誇りとロマンを将来に見出したいという願いが交差する形で、ついに1990年、記念すべき「第一回世界のウチナンチュ大会」がその開催をみる。

これまでの先行研究は、このように世界のウチナンチュ大会¹³（1990年）とのセットで琉球新報の連載企画（1984～85年）に言及してきた。大会に関連する先行研究は他にも、アンケート調査で大会参加者のアイデンティティを分類した野入直美の研究¹⁴や、大会関連行事のイベント内容に関する佐久本義生の考察¹⁵などが積み重ねられてきている。

本論文は、これまで混在した状態で論じられてきた「連載企画」と「大会」の関係をあらためて整理するという問題意識がある。その上で、まずは連載に焦点を当てて考察を進めることとする。連載記事を収録した琉球新報社編集局『世界のウチナンチュ』1・2・3巻に加えて、実際に企画に携わった新聞記者による文献、取材を担当した元記者への聞き取りなどから論述を進める。連載記事の内容がどのようなものであったか、また連載企画はどのようにして琉球新報編集局内で始まったのかに注目することで、沖縄の言論空間から沖縄現代史の一端を考えることにする。

II. 琉球新報の「世界のウチナンチュ」連載記事について

琉球新報は1984年1月1日の新年号の一面で「世界に生きるウチナンチュ」と題した記事で、読者にこう語りかけた¹⁶。

「こんな所にまでウチナンチュがいたのか」一。県民の想像をはるかに超えて、いまや世界五十余カ国にウチナーの同胞たち二十一万人が目覚ましい活躍をしている。かつてわが沖縄の祖先たちは、沖縄の地理的条件を生かし、季節風に乗ってアジア各地を自由に駆けめぐり、素晴らしい文化を築いてきた。歴史の一時期“島ちゃび”（孤島苦）という貧困の中にあえぎ、戦火に打ちひしがれたこともあったが、ニライ・カナイを求め海外へ雄飛しようとする進取の気性は脈々と生き続けていた。北はスウェーデン、カナダから南はアルゼンチン、チリまで、ニューヨークやパリの大都市からアフリカやアマゾンのジャングル、果ては中近東の砂漠の中まで、あらゆる国々でウチナンチュは生きている。郷土ウチナーの文化を誇りに。われわれはあすの沖縄を築くため、自らの足元を見つめるとともに、海外・同胞の活躍にも目を向ける必要があるのではないか。本紙は新年号から「世界に生きるウチナンチュ」をスタートさせる。

日本に復帰して10年が過ぎた県社会の現状を受け止め、国外で生き抜いている同胞たちの姿に学び、沖縄の未来像を描いていこう。「世界のウチナンチュ」企画はこのように幕を開け、連載は1985年12月28日まで約2年にわたって続いた。

連載記事はどのようなものだったのだろうか。記事をまとめた『世界のウチナンチュ』1～3巻は、取材先の地域・国とそれぞれを担当した取材記者の名前を記している。以下に書き出してみると、20以上の国・地域を計10人の記者が現地を訪れて取材に当たっていたことが分かる¹⁷。

『世界のウチナンチュ1』

- ヨーロッパ（野里洋記者）
スペイン／スウェーデン／イタリア／フランス／ドイツ／イギリス
- 東南アジア（宮良健典記者）
台湾／マレーシア／フィリピン／タイ／インドネシア
- オーストラリア・ニュージーランド（慶田城健仁記者・国吉和夫記者）
- ハワイ（鳥取部邦夫記者）

『世界のウチナーンチュ2』

- アメリカ（知念光弘記者、鳥取部邦夫記者）
シカゴ／アトランタ／ロサンゼルス／サンジエゴ／ピッツバーグ／
イリノイ州／ワシントン／ニューヨーク／ニュージャージー
- カナダ（知念光弘記者・鳥取部邦夫記者）
トロント／デューバー／レスブリッジ／カルガリ／バンクーバー／
ブラッドナー
- キューバ・メキシコ（屋良朝男記者）
- メラネシア（三木健記者）
パプアニューギニア／ソロモン諸島
- ミクロネシア（三木健記者）
マジュロ／ポナペ／トラック諸島／ヤップ島／パラオ／サイパン／
テニアン／グアム

『世界のウチナーンチュ3』

- 南米（山根安昇記者・山城興勝記者）
ボリビア／チリ／ペルー／アルゼンチン／ベネズエラ／ブラジル

本章ではこの中から一部の地域を取り上げて記事の内容と特徴を中心に以下で考察する。具体的には、当時の沖縄系移民の大半が居住地最も多くの紙面が割かれた「南米」と、連載トップ（初回）で登場した「ヨーロッパ」の記事に注目する。また、そこから浮かんでくる現地化・国際化というキーワードについて考える。

1 連載記事の内容

i 南米取材記事の概要

「南米は沖縄からの移民が多く、ハワイとともに母県・沖縄とのつながりが最も強い国々であり、沖縄からはるか遠くかけ離れてはいても、県民が日頃、大変身近に感じている国々でもある」。取材が行われた6カ国（ボリビア、チリ、ペルー、アルゼンチン、ベネズエラ、ブラジル）には、当時およそ18万人の沖縄系の人びとが暮らしていたという¹⁸。同地域には山根安昇記者が山城興勝記者と共に取材に出かけた。

大陸のことだけあって、移住地の人たちのサクセス・ストーリーもケタ外れに大きい。農場の面積が沖縄の耕地面積ほどもあるとか、飛行機で農園を回っていると、そうかと思えばサンパウロの野菜市場では、ウチナーグチが飛

び交っているとか、とにかく話題にこと欠かない。沖縄の閉塞感を吹き飛ばすには、もってこいの話題にあふれていた。

ここで三木健が述べるように¹⁹、連載のポリビア編には「農場は飛行場並み」という記事が登場する²⁰。また「千キロ先に卵売り」と題して、「宮古なまり丸出しのウチナーグチで話しかけてきた男があった。身長一メートル五十センチそこらの体だが、全身エネルギーの塊という感じだ」と広大な土地でたくましく生き抜く人物を描く記事もある²¹。他にも、子どもの教育に全力を注ぎ長男が日系初の弁護士になったというコロニアの根間玄正さんの記事では、「ポリビアに根をおろすには現地に溶け込んだ教育を徹底してやる以外にないと、子供の教育に打ち込んできた」として「現地化」を強調する記述も見られた²²。

小柄なウチナーンチュが大きく活躍する話はアルゼンチンの記事でも出てくる²³。1930年にアルゼンチンに渡った大城吉義さんは、古都コルドバで「日本大通り」という名の大きな道路を開通させた。沖縄移民が日系人や「日本」の代名詞のような存在として活躍しているという話題である。ブラジル編にもこんな記事がある²⁴。カンポ・グランデの仲尾徳栄さんは1930年に伯父の呼び寄せを受けてブラジルに渡った。1975年に南マットグロッソ州がマットグロッソ州から独立した際に、州の独立記念式典に声がかかり、日系人の代表として州旗を掲揚した。

南米編の記事の中には、小さな沖縄県にルーツがある移民が広大な南米で生き抜き、ときには日系移民の評判を背負って偉業を果たしているというような特徴が共通するキーワードとして浮かんでくる。

南米での取材のほとんどを沖縄の言葉・ウチナーグチで行ったという山根は、特に印象的な出来事として、ペルーで出会った豊見城村出身の男性の話を書いている²⁵。

ペルーでの取材の時、一人の老人が訪ねてきました。豊見城村出身の比嘉正雄という人でした。私の方言講演を聞いた人から情報を得たものと見えて、比嘉さんはいきなり方言で「ウチナーグチ話ス新聞記者ヌメンソーチャル話シヤシガ、マーンカイウミセーガヤー」と話してこられた。ウチナーグチを話したいためだけに、リマ市から20キロも離れているカヤオ市からわざわざ来られた、というのである。

印象に残ったのは、沖縄の移民が南米で苦難の人生を生きていくなかで、ふるさとの言葉で話したり歌ったりして通じ合うことが心の支えとなっていることを

知ったからだ。山根はこう続ける²⁶。

比嘉さんは昭和五（一九三〇）年、一六歳の時、両親の呼び寄せでペルーに來た。しかし一家の生活が何とか軌道に乗った頃、一九四〇年に起きた“排日運動“ですべてを失い、父は正雄さんと母をペルーに残して弟を連れて沖繩に引き揚げてしまった。妹は暴動で亡くなってしまった。正雄さんと二人でペルーに残った母も間もなく病に倒れてペルーで死亡。貧しさゆえにペルーで生きるしかなかったのですが、ウチナーグチを思いきって話したくて私を訪ねてきたのだった。中略・比嘉さんが孤独に耐えて生きて來られた理由は何かと聞きますと、比嘉さんは泣きながらウチナーの“汗水節“を静かに歌って下さいました。比嘉さんの生きる力がウチナーグチにあることを知ってジーンといたものです。

ここには、故郷の言葉（ウチナーグチ）が、異郷で苦難を乗り越えて生きるなかでいかに重い意味を持つかが思い起こされている。これに関連して山根は「世界のウチナーンチュ」の取材から約10年後、自らの出身である石垣島の宮良小学校創立100周年記念誌で、南米で経験したことを踏まえて故郷や言葉についての考えを次のように伝え残している²⁷。

「ふるさと」を「その人の生まれ育った土地」と規定するならば、「ふるさと」を最も強く感じる人たちは、今は「ふるさと」を離れて異境の地に生活している人々だと言えるでしょう。その典型的なものは海外に移民している人たちや、島を離れて沖繩や本土に住んでいる人たちです。その人たちは自らの「アイデンティティ」を共有するために「〇〇県人会」とか「〇〇郷友会」などを結成して「生きるよすが」としています。…（中略）…

同じようなことはわが「宮良郷友会」にも起きています。沖繩で生まれた子供や孫たちは宮良の方言「メーラムニ」を話すことがだんだん出来なくなってきています。郷友会の会合で方言を話している者は年寄りがほとんどです。郷友会の強い絆となっている方言が失われていくことは淋しい限りで、言葉の絆が失われたらどうなるか、将来を心配せざるを得ません。これは海外の移民たちが直面している問題と同じことなのです。

ここで見えてくるのは、山根による南米取材で、言葉をめぐる経験がアイデンティティの問いとして「世界のウチナーンチュ」という文脈で強く意識されているということである。

ii ヨーロッパ取材記事の概要

南米地域とは異なる文脈で特徴が際立っているのがヨーロッパの取材記事だ。野里洋記者によるヨーロッパ編の連載のなかでは戦後世代の若者らの姿が目立っている。

例えば「世界のウチナンチュ」連載の初回を飾った記事は、沖縄水産高校卒業後に琉球漁業のトロール船員として世界的漁業基地であるスペインのカナリア諸島に出漁したのをきっかけに、ラス・パルマスで起業し、タコやイカを買い付けて日本の商社などに売ることで数億円の年商を上げるに至ったという3人の36歳の若者を取り上げた。また、この記事では「雄飛魂薄れた沖縄、目を開き海外で試そう」という小見出しも見られた²⁸。

ヨーロッパ編では他にもスペインで空手道場を経営する男性たちや、イタリア、フランスで音楽、料理などの分野で留学したり修行に励んだりする県出身者たちが登場した。

また、移住先での国際結婚の話題を通して、移住先に馴染む「現地化」のコツや苦労話も語られている。スウェーデンに渡り永住している男性の記事では、夫婦関係をテーマに次のような具体的な記述も登場した²⁹。

ヨーロッパの女性と結婚したウチナー夫に共通したことだったが、浦崎さんの家庭でも夫婦は全く“平等”。家事は妻の仕事という考えはなく、夫の三夫さんも妻のアンネさんと同じように台所に立つ。「こんなこと、当たり前じゃないですか」。浦崎さんは全然気にしないで、自分の料理を作っていた。

このような若い世代の移住者らの姿は、新聞読者や沖縄県民たちにどのように受け止められたのだろうか。当時の琉球新報編集局長・宮里昭也は次のように認識していた³⁰。

ことに戦後世代の若者の海外での活躍には、多くの人が目を見張った。学校では教材として「世界のウチナンチュ」が使われたし、老人クラブや婦人会など各種の会合で、「世界のウチナンチュ」が話題になり、テーマとして取り上げられた。それは記事や写真もさることながら、そこに登場するウチナンチュの風俗習慣、生活の全く異なる外国での生き方に、読者が共感を覚えたからではないだろうか。共感とは、読者に自信と誇りを抱かせたと思う。われわれが意図した以上に、大きな反響があった。

今、県をはじめとして、国際交流の必要性が叫ばれている。国際交流の基本は何よりも、その国を知ることにある。この「世界のウチナンチュ」

のシリーズを読んでいたければ、国際交流を考える上できっと参考になることが多いと信じている。

ここでは国際化時代における「世界のウチナーンチュ」連載の意義が語られている。またそのなかで、ヨーロッパの取材記事が、戦後世代の移住者らの姿を国際交流の先駆者として映し出すような特徴を持っていることもうかがえる。

iii 現地化・国際化というキーワード

南米とヨーロッパ、そして他の地域を取材した記者たちが見た「世界のウチナーンチュ」とはどのようなものだったのだろうか。編集局長の宮里は、第3巻のあとがきで、記者らが取材を通じて語ったことについて次のようにまとめた³¹。

取材から帰った記者たちがまず語った印象は「どの国でもウチナーンチュはよく現地に溶け込んでいる」ということであった。全部が全部、成功しているわけではなく、中には本人の意思や努力に反し無念の涙を飲みつつ異国での生活を余儀なくされている人も多いが、いずれにしてもウチナーンチュの“現地化”はひときわ目立つようだ。このことは、これからの“国際化時代”に沖縄県人が持つ大いなる能力と言っている。今後ますますこの能力は生かされ、発揮されると思う。

ここで浮かびあがってくるのは「現地化」と「国際化」というキーワードだ。故郷から遠く離れた土地や新しい環境に溶け込む現地化。南米を取材した山根は、その過程でウチナーグチがより強く意識され、海外同胞にとって「生きる力」になったことを述べた。また、海外へ「雄飛」して人生を切り開こうとする国際化の特徴は、ビジネスや留学、国際結婚などの事例を通じて野里のヨーロッパの取材記事でみられた。

この連載が新聞紙面で展開したのは1984～85年だった。島の施政権が米軍から日本へと移り間もなく15年を迎えようとする中で、現地化と国際化という二つの言葉は、さまざまな社会変化や矛盾を乗り越えながら日本に適応するという「日本化」の意味も含んでいたともいえるかもしれない。

2 琉球新報編集局における「世界のウチナーンチュ」連載企画について

それでは連載の企画はどのようにして生まれたのだろうか。

琉球新報編集局で企画が出来上がっていく過程で、これに関わっていた記者らの回想録と本研究で行った聞き取りをもとに考察を進めてみたい。

まず、石垣島出身で1965年に琉球新報に入社した三木健は、「世界のウチナーンチュ」企画が始まった時代背景について振り返り、次のように述べている³²。

時代は丁度、沖縄の日本復帰から十年が過ぎた頃である。当時の沖縄は、重く苦しい閉塞感に覆われていた。日本に復帰はしたものの、米軍基地の大部分は居残り、相変わらず米軍に派生する事件・事故は絶えなかった。ドルから円への切り替えで物価は急激に上昇し、高止まりして生活を苦しめていた。一九七五年に開催された沖縄国際海洋博覧会が閉会すると、企業倒産が相次いだ。人々は「こんなはずではなかった」と日本復帰に対する幻想が崩れ、出口の見えない状況が続いていた。

三木の回想から浮かんでくるのは、日本復帰後の閉塞感や、沖縄の立ち位置を再検討することへの時代の要望のような雰囲気である。このような中で、言い換えれば、日本への復帰に対抗するような物語として「世界のウチナーンチュ」の企画が展開したと考えることができるのではないだろうか。またそれは、復帰から15年経った1987年の沖縄について鹿野政直が「80年代に入って沖縄は、沖縄を中心にぐるりと円を描くかたちでの文化像を打ち立てはじめたごとくみえる」と述べたことにも通じる出来事だったといえるだろう。

さらに三木は次のように続ける³³。

編集局の記者仲間でも、寄ると触るとこの話でもちきりであった。役つきの中堅記者の飲み会でも、何とかしなければ、と話が出たものの、いい知恵が思い浮かばなかった。そんな話の中から、ウチナーンチュはヤマト社会の中ではうだつが上がらないが、海外の移民社会では、結構、活躍している。これは一体どうしてなんだ、という話が出て、それをいちど取材してみてもうか、という話になった。

ここには、記者たちの胸の内に渦巻くある種の焦燥感のようなものが読み取れる。それは「日本人になりたくて、なりきれない心」「世界で活躍するウチナーンチュは、決して狭い日本のワクにはまらず、伸び伸びと活躍している」と述べた西銘順治の言葉と共振するような心情だったといえるのではないだろうか。

このような中で生まれていった「世界のウチナーンチュ」連載企画について、当時の編集局長・宮里昭也は、「世界のウチナーンチュ」の連載記事をまとめた書籍の最終巻のあとがきで、次のように振り返っている³⁴。

琉球新報社の「世界のウチナーンチュ」は、南米をはじめ世界各国で生きる県人の姿を、どんなに遠隔の地であろうとも本社の記者が実際に現地に出かけ、生活の場で取材することに務めた。多くの県人を海外に送り出している沖縄の新聞社としては当然の企画であった。むしろ遅すぎたといってもいいかもしれない。

ここでは会社全体が一丸となり企画を進めたかのようにも感じられる。だが、世界各地で長期の海外取材が必要となる企画を経営陣がすぐに納得したと考えるのは難しい。

これについては、当時の社会部副部長が社長（伊豆見元一）を「社長室に押しかけ、企画の意義を諄々と説明し、その実現に漕ぎつけた」と三木が明かしている³⁵。

ここで出てくる副部長とは南米を取材した山根安昇である。山根は三木と同じく石垣島出身で1965年に琉球新報に入社した。「世界のウチナーンチュ」では担当デスクとして企画を進めたが、これに先立つ1979年には、沖縄から出稼ぎに行った労働者をサウジアラビアで取材し、「見てきたサウジアラビア」という連載を出稿している。このような労働力の移動を巡る国際化の流れのなかで、記者が既に海外取材を経験していたことなども、「世界のウチナーンチュ」の企画が始まっていったことの背景としては見逃せないだろう。

言い換えれば、日本復帰以前から続く海外移民の歴史を振り返るだけでなく、沖縄社会を現在進行形で取り巻いていた国際化や国境を越えた労働力の移動が、企画の誕生と展開に関わっていたということである。

こうして「世界のウチナーンチュ」の連載は1984年の元旦に幕を開けた。連載の初回は大西洋の洋上に浮かぶスペインのカナリア諸島に暮らす青年たちの記事から始まった。

それでは、連載のトップはなぜヨーロッパの、スペインの、カナリア諸島だったのだろうか。

金沢市出身で1967年に琉球新報に入社した野里洋は、ヨーロッパ取材を担当しながら考えていたことについて、筆者の聞き取りに対して、次のように語った³⁶。

最初からパリとかロンドンでは企画のパワーとしては弱い。誰も考えないようなところから始めるのが新聞記者というものだと。カナリア諸島で漁業をしている青年を取り上げたところ、「こんなに遠いところにまでウチナーンチュが出かけて仕事をしているのか」ということで、火がついたような反響があった。

最初は会社の幹部は「台湾からどうか」と。企画が失敗しても台湾から行けば、最悪、痛手はないということだった。私としては、県民が驚くような、誰も考えないようなところに行って衝撃を与えるのが企画としてはいいということ提案した。

ここには、新聞社としての経営面での計算と、そこに勤める記者の書き手としての感覚が、絡み合うようにして連載企画の進展に影響していたことが垣間見える。

さらに野里は、記事の連載がヨーロッパから始まっていることについて、自身が1978年に休暇でヨーロッパを訪れたこととも関係があるとして、次のように話した。

海洋博の直後に今の上皇夫妻が、ひめゆりの塔の前で火炎瓶を投げられて事件が起きた。社会部でそういうことを取材することが非常に多くて、ようやく落ち着いたと思い、78年末から40日くらい1人で行った。オリエント急行に乗りたいという夢があり、イスタンブールからロンドンまで。ただ楽しむだけではないけないと思い、ヨーロッパにいるウチナンチュを取材した。帰ってきて「ヨーロッパのウチナンチュ」というタイトルで連載した。これが一つの原型になったと思う。

ここでは、①日本復帰後の不安定な社会背景と②国際化の流れに加えて、③個人的な休暇でヨーロッパを訪れた記者が沖縄出身者を取材していたことなどが重なり合い、「世界のウチナンチュ」の企画につながっていった重層的な流れを見ることがきる。

Ⅲ. おわりに

本論文は、日本復帰により社会変化の波が押し寄せていた1972年以降の沖縄の時代背景のなかで、琉球新報の「世界のウチナンチュ」連載企画が生まれたことについて、そこに関わっていた記者たちの個々の思いや考え、経験が重なり混ざり合いながら展開していった様子を確認した。

また、連載記事の内容を確認する中で、戦後世代の若い沖縄系移住者らが、ヨーロッパで活躍している様子に加え、南米ではスケールの大きな活躍の話題や、ウチナーグチを通じて民族的な情緒を揺さぶるような取材が重ねられてきたことを見た。地域ごとに異なる特徴も読み取れた。例えば南米編にみられるような、地球の裏側で脈々と世代が続いている沖縄系移民の姿や、ウチナーグチが大切にさ

れていること、そこに宿る誇りがあった。他方では、戦後世代が果敢に挑戦して人生を切り開こうとするヨーロッパ移住・留学のような若者たちの存在があった。

琉球新報の連載が大きな反響を呼んだのは、当時の宮里昭也編集局長が「自信と誇りを抱かせたと思う」と振り返るように³⁷、ヤマト（日本）とウチナー（沖縄）の間で自画像の揺らぎに直面していた当時の県民・読者たちの自己肯定感を呼び起こすきっかけとなったからだといえる。連載記事では、南米で沖縄移民が現地に溶け込んできた歴史を振り返りながら、他郷で生きる中で故郷の言葉（ウチナーグチ）がいかに重い意味を持つかが思い起こされた。これは言い換えればアイデンティティをめぐる問いでもある。

だが同時に、「世界のウチナーンチュ」の企画が国際化という世界的な潮流の中で進んでいったという側面も見落とせない。その中には、沖縄の建設大手である国場組がサウジアラビアやリビアなどに出稼ぎ労働者を送り出していた状況などが含まれる。連載企画にはこのような「国際化」の時代における羅針盤としての位置付けもあったといえる。

また、日本復帰から10年が過ぎた1980年代の沖縄県で地元メディアが海外同胞の姿に注目して「世界のウチナーンチュ」の連載企画が生まれた背景には、混乱に満ちた復帰後の時代を乗り越えるきっかけを、日本ではなく世界に目を向けて探し出そうとするような原動力があった。その中で、連載企画は、日本化という「現地化」を巡る沖縄の自画像をいかに描くことができるかという問いとともに展開していったと位置付けることができるだろう。

琉球新報による「世界のウチナーンチュ」連載後、沖縄県では西銘順治県政（1978～90年）で「世界のウチナーンチュ大会」の開催が決まり、1990年に初めての大会開催に至った。世界中に暮らす沖縄系の移民やその子孫らが沖縄島に「帰郷」して一堂に会するこのイベントは、その後も現在まで、ほぼ5年に一度の頻度で行われている。世界のウチナーンチュ大会³⁸は、琉球新報の連載企画がその源流にあるといわれている。本論文の冒頭で言及した移民研究の先行研究でも「連載」と「大会」が常にセットで論じられてきたことを述べた。この両者の関係性については今後の課題として、別の論文で詳しく考えることとする。

また、本論文が分析対象として取り上げた連載記事が限定的だったという課題も残った。ハワイ、北米、カリブ、台湾、東南アジア、メラネシア、ミクロネシア、オセアニアには、それぞれに沖縄移民の歴史的経緯や特徴があり、「世界のウチナーンチュ」を考えるうえで取りこぼすことはできない。今後の研究でこれらとも向き合いたい。

注

- 1 沖縄は日本有数の移民送り出し県。沖縄県公文書館（2022）によると、戦前の移民は1899年12月5日に27人がハワイへ向けて出発したのが始まりとなった。1903年には、第2回ハワイ移民として40人が金武町出身の當山久三と共に出発。移民を斡旋した當山は「沖縄移民の父」といわれている。戦後は1948年にアルゼンチンへの呼び寄せ移民が始まった。またアメリカの支援のもと、琉球政府がボリビアへの計画移民に着手した。1954年6月19日に第1次計画移民団296人が那覇港を出港した。ボリビアへの計画移民は沖縄戦で荒廃した社会の復興の手段でもあった。1899～1938年に沖縄を出発した移民は7万2,134人で、1940年当時の沖縄県の人口（57万4,579人）の約12%に相当する。沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課・外務省（2022）は、2016年時点で海外に暮らすウチナーンチュ（沖縄県系人）は約42万人としている。
- 2 ウチナーンチュとは沖縄の言葉で「沖縄の人」を意味する。
- 3 三木健. 2018. 「解題 底流に沖縄魂と反骨精神—山根安昇の人生と書き残したもの—」, 山根安昇『明日を生きるウチナーンチュへ』, 新星出版, 331.
- 4 野里洋. 著者によるインタビュー, 那覇市にて, 2021年12月14日.
- 5 『朝日新聞』, 1985年7月20日夕刊.
- 6 大田昌秀はコメントでこう述べた。『『世界のウチナーンチュ』の企画は、沖縄の新聞が明治26年に出来て以来の最も秀れた企画であり、恐らく前代未聞の企画だったと言えるのではないかと。『世界のウチナーンチュ』は庶民の生きざまに視点を据えて取材し連載したのがよかった。多くの読者をつかんだのは当然といえるだろう』。
- 7 それぞれのコメントは次の通り。金武町長・吉田勝栄「わが金武町は移民県・沖縄の中でも数多くの出身者が海外に渡って行った。ほとんどの町民が外国に何らかのつながりがあるほどで、それだけに『世界のウチナーンチュ』に多くの町民が関心の寄せていた」。県国際交流財団専務理事・嘉陽宗陰「『世界のウチナーンチュ』が沖縄に住む私たち県民に与えた誇りと勇気は計りしれないものがある。そればかりか海外にいる沖縄県人に対して、同様の素晴らしい結果をもたらした」。作家・大城立裕「琉球新報の『世界のウチナーンチュ』シリーズは、近來の好企画であった。……移民は底辺は底辺なりに生き抜いた自信を持っている。底辺層だけではない。頭脳流出に類する層も多い。彼らの自信は新しいそれである。現地の社会文化に貢献しているという自信である。それらの多くを『世界のウチナーンチュ』が見せてくれた」。
- 8 鹿野政直. 1993. 『沖縄の淵』 岩波書店.
- 9 金城宏幸. 2005. 「ディアスポラの記憶としての『移民』と現代沖縄社会」, 『移民研究』 1: 88. 金城は「20世紀の沖縄にとって『移民』は一つの社会現象であったと捉えており、ある年の衝撃的な一事件というよりも、懲役忌避者急増（18位）やソテツ地獄（8位）、さらには沖縄戦（1位）後の社会状況などにも世紀を通して連綿と関わっているという意味では、やはり『移民の世紀』と呼ぶにふさわしいものであったと考えている」と述べたが、ここで「懲役忌避者急増（18位）」のように触れているのは、2000年末に琉球新報が紙面で公開した「読者と新報社が選んだ20世紀沖縄20大ニュース」の結果だ。1～10位までは次の出来事が選ばれた。①沖縄戦、②日本復帰、③沖縄サミット開催、④首里城正殿復元、⑤サンフランシスコ講和条約、⑥土地強制収用：「鳥ぐるみ闘争」始まる、⑦海外移民が本格化、⑧ソテツ地獄はじまる、⑨宮森小学校に米軍ジェット機墜落、⑩沖縄国際海洋博覧会。
- 10 同論文, 88.
- 11 引用者による注。「出入国管理及び難民認定法」の改正（1990年6月施行）により、「定住者」等の在留資格が新設され、南米出身の日系人労働者らの受け入れと定住化が進んだ。
- 12 同論文, 90.
- 13 世界のウチナーンチュ大会は、沖縄出身の移民者とその子孫らが沖縄島に「帰郷」する行事。沖縄県が1990年に初めて開催し現在に至るまでほぼ5年に一度の頻度で行われている。

- 14 野入直美. 2012. 「構築される沖縄アイデンティティー第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心にー」, 『移民研究』 8: 1-22.
- 15 佐久本義生. 2017. 「第6回世界のウチナーンチュ大会における『県人会長・ウチナー民間大使会議』について：持続的で発展的な『ゆんたく』のための一考察」, 『移民研究』 13: 85-104.
- 16 『琉球新報』. 1984年1月1日朝刊. 「世界に生きるウチナーンチュ」.
- 17 地名・地域区分の表記は原文のまま。
- 18 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ3』ひるぎ社, 425.
- 19 三木健. 2018. 「解題 底流に沖縄魂と反骨精神ー山根安昇の人生と書き残したものー」, 山根安昇『明日を生きるウチナーンチュへ』, 新星出版, 331.
- 20 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ3』ひるぎ社, 28.
- 21 同書, 32.
- 22 同書, 26.
- 23 山根安昇. 2018. 『明日を生きるウチナーンチュへ』新星出版, 282.
- 24 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ3』ひるぎ社, 332.
- 25 山根安昇. 2018. 「人間の絆としての島言葉ー疎外された方言の再生を求めてー」, 『明日を生きるウチナーンチュへ』新星出版, 140.
- 26 同論文, 140-141.
- 27 山根安昇. 2018. 「ふるさとへの提言ー方言による人づくりをー」, 『明日を生きるウチナーンチュへ』新星出版, 169-170.
- 28 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ1』ひるぎ社, 24.
- 29 同書, 49.
- 30 同書、まえがき。
- 31 琉球新報社編. 1986. 『世界のウチナーンチュ3』ひるぎ社.
- 32 三木健. 2018. 「解題 底流に沖縄魂と反骨精神ー山根安昇の人生と書き残したものー」, 山根安昇『明日を生きるウチナーンチュへ』, 新星出版, 329.
- 33 同書, 329.
- 34 琉球新報編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ3』ひるぎ社.
- 35 三木, 前掲書, 330.
- 36 野里洋. 著者によるインタビュー, 那覇市にて, 2021年12月14日.
- 37 琉球新報編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ2』ひるぎ社.
- 38 2022年は10月31日～11月3日に、第7回大会が開催された。

参考文献

- 鹿野政直. 1993. 『沖縄の淵』岩波書店.
- 金城宏幸. 2005. 「ディアスポラの記憶としての『移民』と現代沖縄社会」, 『移民研究』 1: 88.
- 佐久本義生. 2017. 「第6回世界のウチナーンチュ大会における『県人会長・ウチナー民間大使会議』について：持続的で発展的な『ゆんたく』のための一考察」, 『移民研究』 13: 85-104.
- 世界に広がるウチナーネットワーク. 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課および外務省. 2022年11月11日アクセス <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/page23_003410.html>.
- 土地と移民. 沖縄県公文書館. 2022年11月11日アクセス <https://www.archives.pref.okinawa.jp/event_information/past_exhibitions/6246#1>.
- 野入直美. 2012. 「構築される沖縄アイデンティティー第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心にー」, 『移民研究』 8: 1-22.
- 野里洋. 著者によるインタビュー, 那覇市にて, 2021年12月14日.

- 三木健. 2018. 「解題 底流に沖縄魂と反骨精神—山根安昇の人生と書き残したもの—」, 山根安昇『明日を生きるウチナーンチュへ』, 新星出版, 329-331.
- 山根安昇. 2018. 『明日を生きるウチナーンチュへ』, 新星出版.
- 『琉球新報』. 1984年1月1日朝刊. 「世界に生きるウチナーンチュ」.
- 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ 1』 ひるぎ社.
- 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ 3』 ひるぎ社.
- 琉球新報社編集局. 1986. 『世界のウチナーンチュ 2』 ひるぎ社.

Abstract

Self-Portrait of Okinawa and the Local News Media in 1980s: focusing on Ryukyu Shimpo's serial feature "Uchinanchu in the World" (1984-85)

Jinhee Masahiro LEE

Okinawa's local newspaper, Ryukyu Shimpo, ran a serial feature titled "Uchinanchu in the World" from 1984 to 1985. In this research paper, I examine the content of the serial articles and consider how the project got its start in the local newsroom in the 1980s. Historians have argued that Okinawa, marking its 10-year anniversary of the 1972 reversion to Japan, started to draw its self-portrait by positioning their islands as being at the center of the picture, rather than worrying about their distance to Japan. Previous research also discussed the role of Ryukyu Shimpo's feature as a "reminder" for Okinawa people of their islands' history of connecting to the world, not only to Japan, through immigration.

In this paper, I examine how the local journalist traveled to Europe, Asia, Hawaii, Micronesia, Americas and more for the feature project, and reported on the life stories of the Okinawa diaspora, framing their bravery, success, and pride as Uchinanchu immigrants. Secondly, I discuss how the feature stories played an important role for the local residents in digesting the social oppression and identity confusion caused by numerous changes due to the islands' reversion to Japan. I also explain that the feature project was also pushed forward in the context of arriving globalization in Okinawa during the 1970-80s.

My research includes an analysis of articles of the feature stories, examining memoir writings of the journalist who were involved in the feature project, and also an interview with the journalist.

